

七十一期卒の同窓会長の村岡です。

同窓会を代表して祝辞を述べます。

三月一日は、二十四節気七十二候で云えば『草木萌動』しだいにやわらぐ陽光の下、草木が萌え出し、冬の間に蓄えていた生命の息吹が外に現れはじめる弥生三月。

第一一五期生 全日制 二三三名 定時制 九名 計二四二名の皆さん！伝統ある本荘高校のご卒業誠にめでとうございます。

また、大きな愛情で健やかに育んでいただいた卒業生の保護者の皆様、そして学校教職員の皆様にも心よりお祝いお慶び申し上げます。

卒業にあたり、はなむけの言葉として、二つのフレーズを贈りたいと思います。

一つ目は、

『人生に夢があるのではない、夢が人生をつくる』
『人生に夢があるのではない、夢が人生をつくる』

二つ目は、「加速する人生」であります。

さて、「加速する人生」とは？

例えば、私事で恐縮ですが、私は七十一期卒（皆さんは一一五期ですから）すなわち四十四年前の今日、本高を卒業しました。

過ぎてしまえば、あっという間の四十四年。

まさに「光陰矢の如し」。

それは四十四年間というまとまった時間の経過だけでなく年を取るにつれて、一年、一年の長さが本当に早く短く感じるようになってきました。

「加速する人生」という言葉をつくったフランスの心理学者であるピエール・ジエネの学説によれば、

「人生の一時期における時間の心理的な長さは、年齢に反比例する」と云うのです。

例えば、十歳の少年の一年は人生の十分の一、だが六十歳の一年は人生の六十分の一に過ぎぬから心理的には短く感じられる。

よって、高校時代、人生の十六分の一、十七分の一、十八分の一の三年間は、『人生九十年、百年』とも云われる現代にあつて、人生の未来を選択するとても大切な時間であり、克つ苦樂を共にした同期の仲間とは、一生の財産だと思っています。

それは、すでに卒業した同窓生にとっても同じ、かつて高校という青春時代を共に過ごした仲間と、何十年か経ったあと『あの時の仲間と、今、この瞬間を』共有して『励み』にするのが同窓会なのです。

さて、もう一つのフレーズは、

「人生に夢があるのではない、

夢が人生をつくる」

言い換えれば、「高校・大学に、そして人生に夢があるのではない」高校生として、大学生として、あるいは「人」として、どの様な夢をもつのか？

そして、その夢（志）の実現に向けてどう歩むかが人生なのだと思います。

ほんの一例ですが、九十期卒の伊東大智さんは、本高卒業後、新潟大学教育学部そして大学院に進み『一つの夢』であつた高校の音楽教師になりましたが、三十歳を目前に、『もう一つの夢』で

あつたオペラ歌手になるべく、イタリアに留学し修行、その後、数多くのオペラに出演、決断してから約十年後の四十歳にして地元「カダーレ」にて、オペラを初披露しました。

まさに夢を追い続けている人生であります。

五十七期卒の伊藤勇さんは、入学式に本高の化学の先生との運命的なめぐり逢いのお陰で、有機化学と出会い、結果的にそれが一生の仕事になりました。

東北大学 理学部に進み、有機化学の研究を続け、現在は世界の三大感染症のマラリアの治療薬の

開発を手掛け、さらには会社を建ち上げて、七十六歳の今も、現役社長として世界の人々を救うために『夢』を追い続けています。

まさに人生は、夢に向かつての終わりのない旅とも云えるでしょう。

さて、日本人が人生の旅路において励まされた歌の一位に選ばれたのは「中島みゆき」の楽曲です。

『彼女は、一貫して心に傷を負った人をいたわる歌を書き続けてきました。人生には絶望が転がっているけど、希望もあることを教えてくれます。』

「系」「地上の星」「時代」「空と君のあいだに」などなど、その中の「時代」の歌詞にもあるように、『まわる まわるよ 時代はまわる 喜び悲しみくり返し、別れと出会いをくり返し、今日は倒れた旅人たちも生まれ変わって歩きだすよ』と！優しく包み込んで励ましてくれます。

百年以上「一字一句」も変わることなく歌い続けてこられた本高校歌は、『右文尚武 いそしみて、起て鶴城の健男子』のリフレイン。「起て」は「起きよ！」と云う字、すなわち「先ずは目覚めよ」それは「千古の理想」や

「思想の泉」とあるように、大きな世界に目覚め、文武両道に励め！と

まさに、『夢が人生をつくる』という人生の応援歌そのものであり、そんな校歌をもてたことを誇りに思います。

その本高の伝統と精神を受け継ぎ卒業する皆さんは、これからの長い人生、どんな順境であれ、または逆境であつても、『母校校歌』と『夢が人生をつくる』というフレーズを想い出して、力強く歩きだして下さい。

結びに改めて本日、伝統あるそしてどこよりも同窓の絆の強い本荘高校を卒業され旅立つ第一一五期生二四二名の皆さんに同窓会長として心からのエールを送り祝辞と致します。

令和二年三月一日

秋田県立 本荘高等学校

同窓会長 村岡 兼 幸